

就学前の「気になる子ども」支援のための 包括的スクリーニング尺度作成の試み

——日本における Kiddy-KINDL^R Questionnaire

「幼児版 QOL 尺度親用」を用いて——

An attempt to make a comprehensive screening scale for preschool “worrisome” children
— with additional items of the Kiddy-KINDL^R Questionnaire in Japan —

山口豊一¹⁾・松寄くみ子^{1) 3)}・柴田玲子^{2) 3)}・根本芳子³⁾

磯川かなえ⁴⁾・佐々木円⁴⁾・鈴木和実⁴⁾

Toyokazu YAMAGUCHI¹⁾, Kumiko MATSUZAKI^{1) 3)}, Reiko SHIBATA^{2) 3)}, Yosiko NEMOTO³⁾

Kanae ISOKAWA⁴⁾, Madoka SASAKI⁴⁾, Kazumi SUZUKI⁴⁾

要 約

研究は、幼児期の「気になる子ども」を早期支援するために、早期発見に活用できる尺度を開発することを目的に、幼児版 QOL 尺度親用の追加項目の因子構造を明らかにし、その信頼性、妥当性を検討した。方法は、都内保育園・幼稚園に通う園児の母親計 226 名を対象に、幼児版 QOL 尺度親用と追加項目、SDQ を元に作成した質問紙調査を実施した。有効回答数は 194 名となった。追加項目の因子分析を行った結果、「不機嫌」・「快活度」・「困難度」・「充実度」の 4 因子を抽出した。全体の α 係数は.865 であり、ほぼ満足できる水準の信頼性を確認できたが、今後、再検査信頼性についても検討が必要である。また、QOL 総得点および SDQ 得点との間にも、[肯定的因子得点]（「快活度」、「充実度」）、[否定的因子得点]（「不機嫌度」、「困難度」）各々について適切な相関が見られたため、スクリーニング尺度としての妥当性が示唆された。

キーワード：幼児版 QOL 尺度親用、SDQ、就学前の気になる子ども、スクリーニング尺度、
信頼性・妥当性

1) 跡見学園女子大学 (Atomi University)

2) 聖心女子大学 (University of the Sacred Heart)

3) 昭和大学 (Showa University)

4) 跡見学園女子大学大学院人文科学研究科 (Atomi University Graduate School of Humanities)

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the factor structure of the additional items of the Kiddy-KINDL^R Questionnaire Parent Version and to examine their reliability and validity, in view of developing questionnaires that can be applied in early stages for “worrisome” children. We conducted a questionnaire survey for 226 mothers of children who go to nursery schools or kindergartens in Tokyo. The questionnaire was based on the Kiddy-KINDL^R Questionnaire Parent Version, 26 additional items, and the SDQ. The number of valid responses was 194. The factor analysis of the additional items enabled us to identify four factors: bad temper, cheerfulness, difficulty, and fruitfulness. Although the total coefficient was .865, a largely satisfying level of reliability, further research is needed for to confirm the retest reliability as well. It turned out that the total score of QOL and the factor score of SDQ were correlated properly with both positive and negative factor scores, which suggested that these additional items were valid as a screening scale.

Keywords: Kiddy-KINDL^R Questionnaire, SDQ, preschool “worrisome” children, screening scale, reliability / validity

I はじめに

近年、日本の子どもを取り巻く環境は急速な変化をしており、それとともに様々な行動や精神面の問題への対応の必要性が求められている。幼児教育現場では、保育に困難を伴う「気になる子」が注目され(池田・郷間・川崎・山崎・無藤・尾川・永井・牛尾, 2007)、学校現場では、小学校入学当初から授業中の立ち歩きや私語などによって授業が成立しないどの現象が「小 1 プロブレム」(新保, 2001)として課題となっている。幼児教育から学校教育への移行の問題は、古くから取り組まれている課題であるが、近年の現象には、その背景として「教育上の問題」だけではなく、子どもたちの特性として捉える視点も必要である。子どもたちの特性としての発達上の困難への対応は、平成 17 年に発達障害者支援法が施行され、その一環として乳幼児健診を利用した発達障害の早期発見が進められてきた。さらに、3 歳児健診では問題を指摘されず、それ以降顕在化する問題への対策として、就学前の子どもたちの早期対応にむけて、「5 歳児健診」の有用性も示されている(小枝, 2008)。

困難をかかえる子どもたちの「気づき」を高める一つのツールとして、スクリーニング尺度があるが、子どもたちの抱える様々な困難に関して、包括的に、かつ手軽に、現場の教員が活用できるものは少ない。そこで、我々は子どもの心身の健康を包括的にとらえようとする Kiddy-KINDL^R Parent Version(Questionnaire for Measuring Health-Related Quality of Life in Children and Adolescents

Revised Version, Ravens & Bullinger, 2000)を日本語に翻訳して作成した「幼児版 QOL 尺度親用」(根本, 2012)に注目した。

今回は、幼児期の「気がかりな」子どもを早期に支援するために、早期発見に活用することのできる尺度を開発することを目的に、その追加項目について、さらに関連する項目も併せてその因子構造を明らかにし、その信頼性、妥当性を検討する。

II 方法

1. 調査協力者

都内の保育園 1 園に通う園児の母親 46 名および幼稚園 1 園に通う園児の母親 180 名、計 226 名。

2. 調査時期

2012 年 9 ～12 月に実施した。

3. 調査方法

あらかじめ調査の趣旨および調査票について園の管理職に説明し、実施の了承を得た。調査票は、担任から園児に配布し、持ち帰って記入後担任が回収し、後日受け取った。

4. 質問項目

(1) フェイスシート

記入日、記入者(続柄)、記入者の年齢、子どもの性別、子どもの年齢および学年、兄弟の有無、疾病の有無 について、それぞれたずねた。

(2) 「幼児版 QOL 尺度親用」

ドイツで開発された KINDL^R-Questionnaire (柴田・根本・松寄・田中・川口・神田・古荘・奥山・飯倉, 2003 ; 松寄・根本・柴田・森田・佐藤・古荘・渡邊・奥山・久場川・前川, 2007) の一部である Kiddy-KINDL^R for parents (以下, 幼児版 QOL 尺度親用) を翻訳した質問紙(根本, 2012)を用いた。これは、子どもについて親が回答するもので、QOL を「身体的健康」「精神的健康」「自尊心」「感情」「家族」「友だち」「園生活」の 6 領域からとらえる(Figure.1)。各領域 4 項目ずつ、計 24 項目からなり、5 件法(「1.ぜんぜんない」～「5.いつも」)で、回答を求める。得点が高いほど QOL が高いことを示している。さらに、幼児の特性をとらえるために、22 項目の追加項目が用意されている。

(3) 今回、「幼児版 QOL 尺度親用」の追加項目 22 項目の他に、新たに「気になる」子どもの特性を示すと考えられる 4 項目を加えた計 26 項目の追加項目とした。

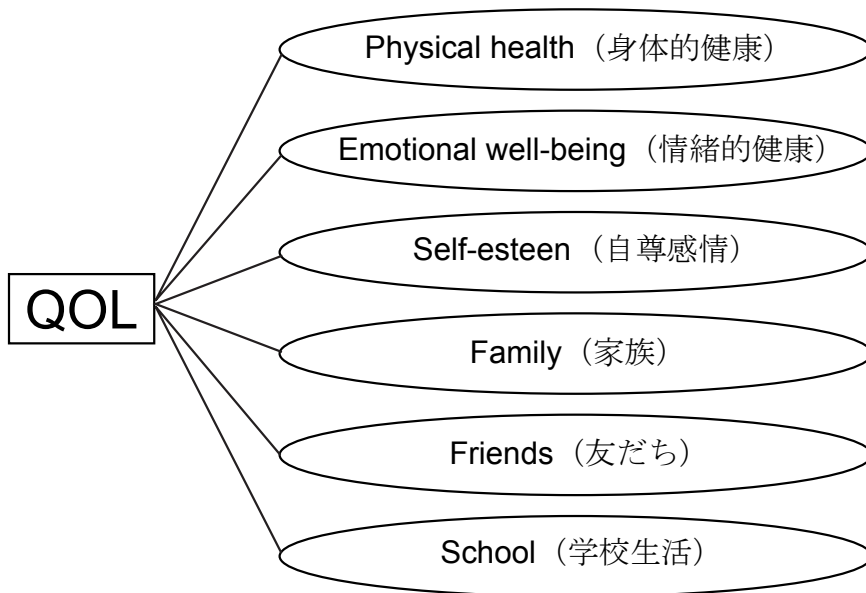


Figure.1 the Kid-KINDL^R の尺度構成

(4)Japanese Version of the Strength and Difficulties Questionnaire (Matsuishi,Tagano,Araki, Tanaka, Iwasaki,Yamashita,Nagamitsu,Iizuka,Ohya,Shibuya,Hara,Matsuda,Tsuda,Kakuma., 2008 以下 SDQ)

Strengths and Difficulties Questionnaire は Goodman(1997)によって開発された幼児期から就学期の行動スクリーニングのための質問紙である。5つのサブスケール（向社会性，多動性，情緒面，行為面，仲間関係）があり，それぞれのサブスケールの合計得点を出し，その領域における支援の必要性を分類する。さらに「多動性，情緒面，行為面，仲間関係」の4サブスケールの合計で TDS（Total Difficulties Score）を算出し，全体的な支援の必要度を把握する。

5. 倫理的配慮

あらかじめ調査の趣旨および調査票について園の管理職に説明し，実施の了承を得た。保護者に対しては，文書にて趣旨を説明し，無記名で，任意の協力を依頼した。

調査票への回答をもって，調査協力への同意とした。

6. 分析方法

1) QOL 総合得点，および下位領域得点，SDQ サブスケール得点，TDS 得点に関して，幼稚園・保育園別，学年別，性別に，基礎統計量を算出し，平均値の差について t 検定，および分散分析を実施した。

- 2) 追加項目得点を因子分析し、因子構造を検討した。
- 3) 追加項目の下位因子尺度得点について、性別、幼稚園・保育園別、学年別に、基礎統計量を算出した。平均値の差について t 検定、および分散分析を実施した。
- 4) 追加項目の下位因子尺度得点と SDQ の下位領域得点の相関を検討した。
- 5) 分析には、統計解析ソフト PAWS 18.0 for Windows を使用し、検定の有意水準は 5% とした。

Ⅲ 結果

1. 分析対象

回収率：配布した調査票のうち 194 名から回答を得られた(有効回収率 85.84%)。

欠損値の処理：記入漏れなどの欠損値は平均値を代入して使用した。

2. 園別、学年別、性別、QOL 総得点および下位領域得点の検討

園別、学年別、性別、QOL 総得点および下位領域得点の基礎統計量は、以下のとおりであった。それぞれ平均値の差の t 検定および分散分析を行ったところ、幼稚園・保育園、学年に関しては有意差は見られなかった(Table.1, Table.2)。性別では、「家族」および「園生活」で有意差が見られ、女児の方が男児よりも得点が高かった($t(191)=2.25, p<.05$, $t(191)=2.847, p<.01$)(Table.3)。

Table.1 幼稚園 保育園別 QOL総得点およびQOL下位領域平均得点の t 検定結果

	園別	N	平均値	標準偏差	F 値	t 値(df)
身体的健康	保育園	39	18.26	2.022	.002	1.267
	幼稚園	155	17.79	2.064		(192)
精神的健康	保育園	39	18.18	1.958	1.261	.468
	幼稚園	155	18.02	1.818		(192)
自尊感情	保育園	39	16.51	2.175	.554	1.432
	幼稚園	155	15.94	2.234		(192)
家族	保育園	39	15.92	2.421	.302	-.395
	幼稚園	155	16.08	2.074		(192)
友だち	保育園	39	16.90	2.010	.973	.138
	幼稚園	155	16.85	1.812		(192)
園生活	保育園	39	16.61	1.954	.032	-1.011
	幼稚園	155	16.96	1.877		(192)
QOL総合得点	保育園	39	102.38	8.344	.099	.500
	幼稚園	155	101.64	8.284		(192)

Table.2 学年別QOL総得点およびQOL下位領域平均得点の分散分析結果

		分散分析の結果				
		度数	平均値	標準偏差	F 値(df)	多重比較
身体的健康	年中	78	17.81	2.346	.989	n.s.
	年長	76	18.12	1.796	(2,191)	
	年少	40	17.58	1.920		
精神的健康	年中	78	18.14	2.066	.811	n.s.
	年長	76	17.86	1.816	(2,191)	
	年少	40	18.28	1.377		
自尊感情	年中	78	16.14	2.536	.230	n.s.
	年長	76	15.92	2.255	(2,191)	
	年少	40	16.15	1.424		
家族	年中	78	16.21	2.183	.434	n.s.
	年長	76	15.89	2.176	(2,191)	
	年少	40	16.00	2.025		
友だち	年中	78	16.81	1.809	.711	n.s.
	年長	76	17.04	1.829	(2,191)	
	年少	40	16.63	1.970		
園生活	年中	78	16.68	2.048	1.050	n.s.
	年長	76	16.93	1.864	(2,191)	
	年少	40	17.20	1.604		
QOL総合得点	年中	78	101.79	9.677	.001	n.s.
	年長	76	101.76	7.757	(2,191)	
	年少	40	101.83	6.218		

Table.3 男女別 QOL下位領域平均得点のt検定結果

	性別	N	平均値	標準偏差	F 値	t 値(df)
身体的健康	男	93	17.94	1.961	.082	.207
	女	100	17.87	2.130		(191)
精神的健康	男	93	18.11	1.710	1.230	.298
	女	100	18.03	1.964		(191)
自尊感情	男	93	15.97	2.429	3.655	-.538
	女	100	16.14	2.045		(191)
家族	男	93	15.70	2.176	.208	-2.250*
	女	100	16.39	2.068		(191)
友だち	男	93	16.81	1.901	.597	-.463
	女	100	16.93	1.805		(191)
園生活	男	93	16.50	1.804	.033	-2.847**
	女	100	17.26	1.916		(191)
QOL総合得点	男	93	101.01	8.402	.281	-1.353
	女	100	102.62	8.100		(191)

 ** $p < .01$ * $p < .05$

3. 追加項目の因子分析

「幼児版 QOL 尺度親用」の追加項目の 22 項目に、さらに 4 項目を加えた 26 項目の因子構造を検討するために、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。この結果、固有値の落差、因子の解釈の可能性を考慮し、最終的に 4 因子を抽出した(Table.4)。

Table. 4 「幼児版QOL尺度親用」追加項目因子分析

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
不機嫌度 ($\alpha=.800$)				
7-21 私の子どもは 激しく 泣いた	.835	-.028	.076	.172
7-7 私の子どもは すぐ 泣いていた	.709	.006	-.026	-.042
7-22 私の子どもは すぐに かんしゃくを起こした	.625	.005	.116	-.023
7-17 私の子どもは 痛みを 訴えていた	.484	-.291	.179	.245
7-20 私の子どもは すぐに 不満そうになった	.450	.056	-.073	-.358
7-12 私は 子どもを しかった	.387	.344	-.076	-.301
7-1 私の子どもは 機嫌が悪く ぐずっていた	.351	-.162	-.081	-.345
快活度 ($\alpha=.726$)				
7-16 私の子どもは 活発で 元気いっぱいだった	-.043	.806	.105	.097
7-6 私の子どもは 飛び回って とても 活発だった	-.015	.724	.090	.015
7-18 私の子どもは 外向的だった	-.074	.449	.167	.334
7-5 私の子どもは ぐっすり 寝ていた	-.088	.448	-.166	-.056
7-13 私は 子どもを ほめた	.238	.432	-.228	.066
困難度 ($\alpha=.755$)				
7-26 私の子どもは 断りもせずに(衝動的に)一人で遊びに行ってしまう	.055	-.106	.585	.144
7-25 私の子どもは 数や文字の学習が苦手にみえた	-.107	-.073	.580	-.238
7-24 私の子どもは 公共の場で はしりまわった	.041	.138	.488	-.070
7-14 私の子どもは 先生や 世話をしてくれる人を 困らせた	.257	.190	.432	-.066
7-10 私の子どもは すぐ気が散って うわのそらだった	.115	.005	.382	-.247
7-15 私の子どもは 神経質で 落ち着きがなかった	.163	-.093	.353	-.216
充足度 ($\alpha=.729$)				
7-3 私は子どもに対して 辛抱強く 理解あるところを 示すことができた	.103	.028	-.073	.629
7-9 私の子どもは 上手に集中することができたし 注意深かった	.032	-.042	-.294	.580
7-19 私の子どもは 自分が始めたことは すべてうまくいった	.121	.146	-.209	.531
7-8 私の子どもは 機嫌が良く よい気分だった	-.165	.211	.076	.484
全体 ($\alpha=.865$)				
因子寄与率				49.33%
因子相関				
	I	II	III	IV
	—	-.158	.421	-.570
		—	-.025	.317
			—	-.480
			IV	—

因子抽出法：主因子法 回転法：プロマックス回転

項目数：22項目

因子分析削除項目：7-2, 7-4, 7-11, 7-23 計4項目

第 1 因子は、「私の子どもは激しく泣いた」「私の子どもはすぐ泣いていた」「私の子どもはすぐにかんしゃくを起こした」など、子どもの機嫌に関する項目が多いことから「不機嫌度」因子と命名した。第 2 因子は、「私の子どもは活発で元気いっぱいだった」「私の子どもは飛び回ってとても活発だった」「私の子どもは外向的だった」など、子どもが活発に活動していることに関する項目が多いことから「快活度」因子と命名した。第 3 因子は、「私の子どもは断りもせずに(衝動的に)一人で遊びに行ってしまう」「私の子どもは数や文字の学習が苦手なみえた」「私の子どもは公共の場で走り回った」など、子どもが持つ困難に関する項目が多いことから「困難度」因子と命名した。第 4 因子は、「私は子どもに対して辛抱強く理解あるところを示すことができた」「私の子どもは上手に集中することができたし注意深かった」「私の子どもは自分が始めたことはすべてうまくいった」など、子どもの良い面に関する項目が多いことから「充実度」因子と命名した。

また、Cronbach の信頼性係数 α は全体で .865、各因子では「不機嫌度」因子(7 項目)は .800、「快活度」因子(5 項目)は .726、「困難度」因子(6 項目)は .755、「快活度」因子(4 項目)は .729 であった。

4. 男女別、幼稚園・保育園別、追加項目下位領域得点の検討

追加項目の下位因子で「不機嫌度」因子および「困難度」因子を併せて[否定的因子]、「快活度」因子および「充実度」因子を併せて[肯定的因子]として、男女別、幼稚園・保育園別、学年別にそれぞれ平均値の差の検討を実施した。その結果、幼稚園・保育園別、学年別には有意差は見られなかった(Table.5, Table.6)。

Table.5 幼稚園・保育園別 否定的・肯定的因子得点の t 検定結果

	園別	N	平均値	標準偏差	F 値	t 値
否定的因子得点	保育園	39	28.75	7.355	.637	.190
	幼稚園	155	28.53	6.184		(192)
肯定的因子得点	保育園	39	36.91	3.627	.263	.547
	幼稚園	155	36.56	3.510		(192)

Table.6 学年別 否定的・肯定的因子得点の分散分析結果

分散分析の結果						
		度数	平均値	標準偏差	F 値(df)	多重比較
否定的因子得点	年中	78	28.41	6.729	1.248	$n.s.$
	年長	76	28.02	6.335	(2,191)	
	年少	40	29.96	5.880		
肯定的因子得点	年中	78	36.62	3.745	.032	$n.s.$
	年長	76	36.59	3.631	(2,191)	
	年少	40	36.76	2.915		

また、[否定的因子]の性別においては 1%水準で有意差が見られ、女兒よりも男児の方が高かった ($t(191) = 4.06, p < .001$)(Table.7)。

Table.7 男女別 否定的・肯定的因子得点の t 検定結果

	性別	<i>N</i>	平均値	標準偏差	<i>F</i> 値	<i>t</i> 値
否定的因子得点	男	93	30.44	6.720	1.569	4.060***
	女	100	26.82	5.649		(191)
肯定的因子得点	男	93	36.46	3.455	.097	-.791
	女	100	36.86	3.572		(191)

*** $p < .001$

5. QOL 追加項目 [否定的因子得点]・[肯定的因子得点] と QOL 総合得点および SDQ の向社会的得点、TDS との相関

QOL 追加項目の [否定的因子得点]・[肯定的因子得点] と QOL 総合得点、SDQ の向社会的得点、TDS との関連性を調べるため、ピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、各得点との間に相関がみられた(Table.8)。特に QOL 総合得点に対して、追加項目の [否定的因子得点] ($r = -.615, p < .01$) は、比較的強い負の相関を示した。同じく [肯定的因子得点] ($r = .740, p < .01$) は、比較的強い正の相関を示した。

また、SDQ の向社会的得点に対して、[肯定的因子得点] ($r = .354, p < .01$) が弱い正の相関を示し、[否定的因子得点] ($r = -.328, p < .01$) が弱い負の相関を示した。TDS に対しては、[否定的因子得点] ($r = .441, p < .01$) が比較的強い正の相関を示し、[肯定的因子得点] ($r = -.390, p < .01$) が弱い負の相関を示した。

Table.8 否定的・肯定的因子得点と他の尺度との相関

	(n=194)	
	否定的因子得点	肯定的因子得点
QOL総合得点	-.615***	.740***
SDQ向社会的	-.328***	.354***
TDS	.441***	-.390***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

IV 考察

1. QOL 尺度下位領域得点における男女別・幼稚園保育園別・学年別での平均値の差の検討

QOL 尺度の下位領域得点に関して平均値の差の検討を行ったところ、幼稚園および保育園の間、

学年の間には有意差が見られなかった。これは、この尺度が幼稚園および保育園、学年に関わらず利用できるものであることを示唆している。

また、男女間では「家族」($t(191)=2.25, p<.05$) および「園生活」($t(191)=2.847, p<.01$)で有意差が見られ、これは保護者の視点からすると、家庭生活場面と園生活場面において性別による差が比較的分かりやすいために差が出たと考えられる。また、実際女兒よりも男児の方が、発達障害などの困難を抱えている頻度が高いため、顕著に出やすい「家族」および「園生活」において差が出たものと思われる。

2. 追加項目の因子分析について

「幼児版 QOL 尺度親用」の追加項目 22 項目にさらに 4 項目加えた全 26 項目に関して因子分析を行った結果、「不機嫌度」因子、「快活度」因子、「困難度」因子、「充実度」因子の 4 因子を抽出した。

3. 信頼性について

今回の Cronbach の信頼性係数 α は、ほぼ満足できる水準の信頼性を確認できた。しかし、今回の調査は保育園・幼稚園 1 園ずつ 1 回のみの調査であることから、今後、再検査信頼性の再検討も必要と考えられる。さらに、対象者を保護者のみならず、保育園・幼稚園の先生に広げることで、この尺度のさらなる広がりが見られるものと考えられる。

4. 追加項目因子下位領域における男女別・幼稚園保育園別・学年別での平均値の差の検討

追加項目の因子下位領域で「不機嫌度」因子および「困難度」因子を併せて[否定的因子]、「快活度」因子および「充実度」因子を併せて[肯定的因子]として、それぞれの平均値の差の検定を行ったところ、幼稚園・保育園、学年には有意差は見られなかった(Table.5, Table.6)。これは、この尺度が幼稚園および保育園、学年に関わらず同じような結果を算出できる可能性を示唆している。

また、[否定的因子]では、性別において、1%水準で有意差が見られ、女兒よりも男児の方が高かった($t(191)=4.06, p<.001$)。これは、女兒よりも男児の方が発達障害などの発達の困難を抱えている可能性との関連が推測される。

5. QOL 追加項目[否定的因子]得点・[肯定的因子]得点と QOL 総合得点および SDQ の向社会的得点、TDS との相関

QOL 総合得点と QOL 追加項目[否定的因子]得点・[肯定的因子]得点の間には、[否定的因子]得点($r=-.615, p<.01$)は比較的高い負の相関、[肯定的因子]得点($r=.740, p<.01$)が比較強い正の相関を示した。

また、SDQ の中でも子どものネガティブな側面に焦点を当てた TDS に対して、追加項目の[否

定的因子]得点 ($r=.441$, $p<.01$) は中程度の正の相関を示し, [肯定的因子]得点 ($r=-.390$, $p<.01$) は弱い負の相関を示した。

以上の結果から, 幼児期の「気になる」子どもをスクリーニングするための尺度として, 今回の追加項目が, ある程度の妥当性を持つことが示された。

なお, この論文は, 平成 24 年度跡見学園特別研究助成費を受けた。

参考・引用文献

Goodman R (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586.

池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・無藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究 *小児保健研究* 66(6), 815-820.

小枝達也 (2008) 5 歳児健診 小枝達也 (編) 発達障害の診療・診断エッセンス 診断と治療社, 5-63.

Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, Tanaka Y, Iwasaki M, Yamashita Y, Nagamitsu S, Iizuka C, Ohya T, Shibuya K, Hara M, Matsuda K, Tsuda A, Kakuma T (2008) Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): a study of infant and school children in community samples. *Brain Dev*, 30, 410-5.

松寄くみ子・根本芳子・柴田玲子・森田孝次・佐藤弘之・古荘純一・渡邊修一郎・奥山真紀子・久場川哲二・前川喜平 (2007) 日本における「中学生版 QOL 尺度」の検討 *日本小児科学会雑誌* 111 (11), 1404-1410.

根本芳子 (2012) 幼児版 QOL 尺度—日本における Kiddy-KINDL^R Questionnaire「幼児版 QOL 尺度」の検討— *子どもの健康科学* 13(1), 47-51.

柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子・田中大介・川口毅・神田晃・古荘純一・奥山真紀子・飯倉洋治 (2003) 日本における Kid-KIDL^R Questionnaire (小学生版 QOL 尺度) の検討 *日本小児科学会雑誌* 107 (11), 1514-1520.

新保真紀子 (2001) 「小 1 プロブレム」に挑戦する 明治図書